

『土佐日記』「馬のはなむけ」

1、はじめに

・作者：**紀貫之**まきのつらゆき

・成立：**平安時代**（935年ごろ）〔平安時代は794～1185年ごろ〕

・ジャンル：**日記文学**

・別タイトル：**「門出」**など

・『土佐日記』の特徴：**仮名文**で書かれた最古の日記文学。女性に仮託して記している。（貫

之自身を第三者の視点で書く。）

土佐守の任期が終わり、京への帰路、934年12月21日～935年2月16日

までの55日間を記録する。

・要約

京に戻ってきて家に帰ると、隣人に留守を頼んでいたはずだが、家は崩れ傷んで庭までも荒れている。庭の松は一部分なくなっている。しかしそこには小松が生えている。土佐で娘を亡くした紀貫之は、その松と自身の娘を重ね、亡き娘との別れを悲しんだ。

京に入り立ちてうれし。家に至りて門に入るに、月明かければ、いとよくありさま見ゆ。
聞きしよりもまして、言ふかひなくぞほれ破れたる。家に預けたりつる人の心も荒れたる
なりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。さるは便りごとにも
のも絶えず得させたり。今宵「かかること。」と声高にももの言はせず。いとほしく見ゆ
れど、いころぞしはせむとす。

さて池めぐりてくぼまり、水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千
や過ぎにけむ。かたへはなくなりけり。今生ひたるぞ交じれる。大方のみな荒れにたれば、
「あはれ。」とぞ人々言ふ。思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがつちに、この家にて生まれ
し女子のもろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人もみな、子たかりてののしる。かかる
うちに、なほ悲しきにたえずして、ひそかに心知れる人と言へりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しき
とぞ言入る。なほ飽かずやあらむ。またかくなむ。

見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせまじや
忘れがたく口惜しきこと多かれど、え風くさず。とまれかうまれ、とく破りてむ。

京に入り立ちてうれし。家に至りて門に入るに、月明かければ、いとよくありさま見ゆ^①。
聞きしよりもまして、言ふかひなく^②ぞこぼれ破れたる^③。家に預けたりつる人の心も荒れ
たるなりけり^④。中垣^⑤こそあれ^⑥、「」家のやうなれば、望みて預かれるなり。なるは^⑦便
り^⑧と^⑨にものも絶えず得させたり。今宵^⑩かかること。「と声高^⑪にもものも言はせず。いとほ
しうく見ゆれど、」^⑫はせむとす。

さて池めぐりてくぼまり、水つける所あり。ほとりに松もありき^⑬。五年六年のうちに、千
や過ぎにけむ^⑭。かたへ^⑮はなくなりけり^⑯。今生ひたるぞ交じれる^⑰。大方のみな荒れに
たれば、「あはれ。」とぞ人々言ふ^⑱。思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家に
て生まれし女子^⑲のもろともに帰らねば、いかがは悲しき^⑳。船人^㉑もみな、子たかりての
しる^㉒。かかるうちに、なほ悲しきにたえずして、ひそかに心知れる人^㉓と言へりける歌、
生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しと^㉔

とぞ言へる^㉕。なほ飽かずやあらむ^㉖。またかくなむ^㉗。

見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせまじや^㉘

忘れがたく口惜しき^㉙こと多かれど、え風くさず^㉚。とまれかつまれ^㉛、とく^㉜破りてむ^㉝。

3、補足・注／重要単語・文法

- ① **見ゆ**…(自然と)見える。もとは、マ上「見」の未然形+自発・受身・可能の助動詞「ゆ」で、それが一語になった。助動詞「ゆ」は奈良時代ほどまで使われていた。
- ② **言ふかひなく**…言ってもしかたがない。ほかに、取るに足らない、無駄など。
- ③ **ぞくたる**…係り結びの法則。強意の係助詞「ぞ」は結びの語に連体形を要求する。そのため助動詞「たり」は連体形「たり」になる。
- ④ **けり**…「こ」では詠嘆。
- ⑤ **中垣**…家の境にある垣根。
- ⑥ **中垣こそあれ**、…中垣があるけれど。係り結びの逆説用法。通常、係助詞「こそ」は結びの語に已然形を要求し、文を終始させる。しかし、今回のように文が終始しない場合は逆説として解釈する。
- ⑦ **さるは**…そこではあるが。逆説、補足、転換などを表す接続詞。もとは「変動詞」なり「の連体形+係助詞」は「で、それが一語になった。
- ⑧ **便り**…機会。ほかに、ゆびごころ、縁、都合のよさごと、手紙など。
- ⑨ **こころざし**…お礼。ほかに、愛情、意向など。
- ⑩ **き**…過去の助動詞「き」の終止形。過去の助動詞には「けり」と「き」がある。「けり」は、書き手や話し手が直接体験していない伝聞過去を表す傾向がある。それに対し「き」は、書き手や聞き手が直接体験した体験過去を表す傾向にある。

⑪ **千歳や過ぎにけむ**…千年が過ぎたのでしょうか。疑問の係助詞「や」「は結びの語に連体形を要求するので助動詞「けむ」は連体形。助動詞「けむ」は過去推量を表し、過去の事柄について推測することを表す。

⑫ **かたへ**…一部分。片方。

⑬ **にけり**…うってしまった。完了の助動詞「ぬ」「の連用形+過去の助動詞「けり」。「なお、完了の助動詞「ぬ」「つ」は、過去の助動詞「き」「けり」を伴って、「てき」「けり」「てけり」「てけり」の形をとる、「うってしまった」「うってしまった」という訳になることが多い。

⑭ **ぞ**…係り結びの法則。強意の係助詞「ぞ」は結びの語に連体形を要求する。そのため助動詞「り」「は連体形」になる。

⑮ **ぞ**…**言ふ**…係り結びの法則。強意の係助詞「ぞ」は結びの語に連体形を要求する。そのため助動詞「言ふ」は連体形になる。

⑯ **女子**…娘。この娘は、土佐に赴任する紀貫之たちと共に京から土佐に行き、紀貫之の赴任中に、亡くなっている。

⑰ **いかがは悲しき**…どんなに悲しいことか。「いかが」はもともと「いかにか」であり、「か」(傍線部)「が疑問の係助詞である。よって、結びの語に連体形を求める。だから「悲し」は連体形「悲しき」となる。

⑱ **船人**…同じ船に乗り合わせた人。

⑲ **ののしる**…大声で騒ぐ。ほかに、評判になる、勢力をふるうなど。

⑳ 心知れる人…気心知れる人のことで、ここでは妻のこと。

㉑ 生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさ…(この家で)生まれた

(我が子)も(土佐で)亡くなり、この家(に)帰らないのに、我が家に小松(＝生えたての松)

があるのを見ることは悲しいことよ。紀實之は赴任先の土佐で、共に京を発たった娘を亡くしている。そのような中、家に帰ると家にあつた松から小松(生えてきたばかりの松)が生えている。これを見て、娘を松に重ね、松は新しく芽吹いているにもかかわらず、自分の娘は亡くなっているというところが、対比的に意識されてしまひ悲しく感じている。

㉒ ぞゝる…係り結びの法則。強意の係助詞「ぞ」は結びの語に連体形を要求する。そのため助動詞「り」は連体形「る」になる。

㉓ 飽かずやあらむ…満足しない(＝悲しきは尽きない)のでしようか。「飽かず」で満足しないの意。ここでは、悲しみが尽きないことや、悲しみを言葉で言い表しきれていないということ。疑問の係助詞「や」は結びの語に連体形を要求するので助動詞「む」は連体形。

㉔ かくなむ…このように(詠む)。係助詞「なむ」の結びの語(ここでは「言入る」がある)などが省略されている。これを係り結びの省略という。

㉕ 見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせまじや…亡くなった我が子が千年生える松のように生きるのを、(私たちが)見るとしたら、(遠い土佐で)永遠の悲しい別れをしたかどうか、いや、していないだろう。「見し人」とは、以前会った人と訳すことが多いが、ここでは亡くなった娘のこと。娘を松に重ね、娘が松のように長生きする姿を見られた

ら、永遠の悲しい別れをしながらも済んだと嘆いている。歌中の「まじか」は、事実に反する事柄を問題にする、反実仮定の助動詞「まじ」の未然形である。この歌のよう「…まじかばらまじ」の形を取ると、「…とじたららだらうじ」と訳す。ほか「…(ま)せはらまじ」も同様な意味を表す。また、「や」は反語ではあるが、係助詞説と終助詞説がある。

⑳ **口惜しき…**残念だ。

㉑ **えんくそす…**書き尽くせなう。副詞「えん」は、打消しの表現(「じ」では「す」を伴って、不可能の意を表し、「…できなう」と訳す。

㉒ **とまれかづまれ…**とにかへ。「ともあれかくもあれ」の変形「とまれかづまれ」のウ音便。「ともあれかくもあれ」は「tomarekakumoare (ともあれかくもあれ)」で発音の都合上、「moa」が「ma」に変化し「tomarekakumare」となった。その後「ku」が「u」に変化した(＝ウ音便化した)。

㉓ **とく…**はやく。

㉔ **てむ…**てしまおう。強意(完了)の助動詞「し」の未然形+意志の助動詞「む」。この「てむ」のよう「てなむ」「しへく」「ぬへく」のとき、助動詞「し」「ぬ」は強意であることが多い。また、完了「ぬ」が自然的・無意識的であるのに対し、完了「し」は人為的・意識的であるといえる。「し」には紀貫之の人に見せるほどの日記ではないという謙遜と、失った娘を思い出す契機になってしまっこの日記を破り去りたいという気持ちが込められていると考えられる。

4、現代語訳

(土佐での任期を終え都に戻ってきて)京に立ち入ってうれしい。(自身の)家に着いて門を入ると、月が明るいで、とてもよく(家の)様子が見える。(話に)聞いていたよりもいっそう、言っても仕方ないほど(家は)崩れ壊れている。家を預けていた人の心も荒れているのだな。(預けた人の家と自分の家の間に)垣根はあるけれど、(その二つの家は)一つの家のようなので、(向こうが)望んで預かったのだ。とはいえ、機会のあるたびに好礼の品を絶えず与えた。(しかし)今夜は(従者に)「このようにこと(は)どうしようことだ」。(とは)大声で言わせない。とても薄情に思われるけれど、(預かってくれた人に)お礼はしようと思っ。

さて、池のよつにくぼみ、水にたまっている所がある。その傍らに松もあった。五、六年のうち、千年が過ぎたのでしょうか。(松の)一部分はなくなってしまった。今(新しく)生えている松が混じっている。ほとんどすべて荒れてしまっているので、「ああ。」と人々は言う。(いれらを見て)思い出さないうちはなく、恋しく思うことの中に、この家で生まれた女の子が一緒には(土佐から京に)帰らない)「亡くなった)ので、どんなに悲しいことか。同船した人たちもみんな、子供が集まり大声で騒いでいる。こっぴつしているうちに、やはり悲しさに耐えられないで、ひっそりと気心知れる人(妻)と詠んだ歌、

(この家で)生まれた(我が子)も(土佐で)亡くなり、この家に(帰らないのに、我が家に小松)「生えたての松)があるのを見ることは悲しいことよ。

と言った。とはいえやはり満足しない(＝悲しとは戻まない)のでしょぅか。またこのように(詠む)。

亡くなった我が子が千年生える松のように生きるのを、(私たちが)見るとしたら、(種

い土佐で)永遠の悲しい別れをしたらろぅか、いや、していならだろぅ。

忘れがたく残念なことが多いけれど、書き戻かせない。と(下)か(上)の日記を(早く破り捨ててしまおう)。

5. 1、本文と現代語

(土佐での任期を終え都に戻ってきて)京に立ち入ってうれしい。(自身の)家に着いて門を入ると、月が明るいので、とてもよく(家の)様子が見える。

京に入り立ちてうれし。家に至りて門に入るに、月明かければ、いとよくありさま見ゆ。

(話に)聞いていたよりもいっそう、言っても仕方のないほど(家は)崩れ壊れている。家を預けていた人の心も荒れ

聞きしよりもまして、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。家に預けたりつる人の心も荒れ

ているのだな。(預けた人の家と自分の家の間に)垣根はあるけれど、(その二つの家は)一つの家のようなので、(向こうが)望んで預かったのだ。とはいえ、機

たるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。さるは便

会のあるたびにお礼の品を絶えず与えた。(しかし)今夜は(従者に)「このようなこと(は)やういふこと(だ)」。とは大声で言わせない。とてせ

りいふにものも絶えず得させたり。今宵「かかるといふ」と声高にものも言はせず。うつは薄情に思われるけれど、(預かってくれた人に)お礼はじようと思ふ。

しつと見ゆれば、いふにせむむとす。

さて、池のようにくぼみ、水にたまっている所がある。その傍りに松もあった。五、六年のうちに、千年が

わたって池めぐくほまり、水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年

過ぎたのでしょうか。(松の)一部分はなくなってしまった。今(新しく)生えている松が混じっている。ほとんどすべて荒れて

や過ぎにけむ。かたへはなくなりけり。今生ひたるぞ交じれる。大方のみな荒れに

しまっているのだ。「あ。」「と人々は言ふ。(こ)わらを見て(思い出さな)いこと(は)なく、恋しく思ふ(こ)の(中)に、この家で

たれば、「あはれ。」「とぞ人々言ふ。思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家に

生まれた女の子が一緒には(土佐から京に)帰らない(＝亡くなった)ので、どんなに悲しいことが。同船した人たちもみんな、子供が集まり大声で

て生まれし女子のまもるともに帰らねば、いかがは悲しき。船人もみな、子たかりての

騒いでいる。うつついでいるうちに、やはり悲しさに耐えられないで、ひっそりと気心知れる人（＝妻）と詠んだ歌、

しる。かかるうちに、なほ悲しきに入らずして、ひそかに心知れる人と言へりける歌、

（この家で）生まれた（我が子）も（土佐で亡くなり、この家に）帰らないのに、我が家に小松（＝生えたての松）があるのを見ることは悲しいことよ。

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しよ

と言った。とはいえやはり満足しない（＝悲しきは尽きない）のでしょうか。またこのように（詠む）

とぞ言へる。なほ飽かずやあらむ。またかくなむ。

亡くなった我が子が千年生える松のように生きるのを、（私たちが）見るとしたら、（遠い土佐で）永遠の悲しい別れをしただろうか、いや、していないだろう。

見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせまじや

忘れがたく残念なことが多いけれど、書き尽くせない。とにかく（この日記を）早く破り捨ててしまおう。

忘れがたく口惜しきこと多かれど、え風くそず。とまれかうまれ、とく破りてむ。

5. 2、本文と現代語訳

(土佐での任期を終え都に戻ってきて)京に立ち入ってうれしい。(自身の)家に着いて門を入ると、月が明るいので、とてもよく(家の)様子が見える。

京に入り立ちてうれし。家に至りて門に入るに、月明かければ、いとよくありさま見ゆ^①。

(話に)聞いていたよりもいっそう、言っても仕方のないほど(家は)崩れ壊れている。家を預けていた人の心も荒れ

聞きしよりもまして、言ふかひなく^②そこぼれ破れたる^③。家に預けたりつる人の心も荒れ

ているのだな。(預けた人の家と自分の家の間に)垣根はあるけれど、(その二つの家は)一つの家のようなので、(向こうが)望んで預かったのだ。とはいえ、機

たるなりけり^④。中垣^⑤こそあれ^⑥、「一」家のちづなれば、望みて預かれるなり。なるは^⑦便

会のあるたびにお礼の品を絶えず与えた。(しかし)今夜は(従者に)「このようなこと」は(やむを得ず)つとて(「とは大声で言わせない。とてせ

り^⑧つとつともも絶えず得^えせたり。今宵^⑨」かかると。「と^こ声高^{こわだか}にものも言はせ^せ。つとほ薄情に思われるけれど、(預かってくれた人に)お礼はしようと思う。

つとつ見ゆれば、つとつせむせむす。

が さて、池のようにくぼみ、水にたまっている所がある。その傍りに松もあった。五、六年のうちに、千年

わたって池めぐくぼまり、水つける所あり。ほとりに松もありき^⑩。五年六年のうち^{ちとせ}に、千年

過ぎたのでしょうか。(松の)一部分はなくなってしまった。今(新しく)生えている松が混じっている。ほとんどすべて荒れて

や過ぎにけむ^⑪。かたへ^⑫はなくなりけり。今生^⑬ひたるぞ交じれる^⑭。大方のみな荒れに

しまっているのだ。(「ああ。」「と人々は言う。))わらを見て(思い出さないうことはなく、恋しく思う)つとつこの家^⑮

たれば、「あはれ。」「とぞ人々言ふ^⑯。思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうち^⑰に、この家に

生まれた女の子が一緒には(土佐から京に)帰らない)＝亡くなった)ので、どんなに悲しいことか。同船した人たちもみんな、子供が集まり大声で

て生まれし女子をんなこのもうともに帰らねば、いかがは悲しき⑮。船人ふなびともみな、子たかりてのの騒いでいる。こつしてゐるうちに、やはり悲しさに耐えられないで、ひっそりと気心知れる人⑰（妻と詠んだ歌、

しる。⑱）かかるうちに、なほ悲しきにたえずして、ひそかに心知れる人⑳と言へりける歌、

（この家で）生まれた（我が子）も（土佐で亡くなり、この家に）帰らないのに、我が家に小松（＝生えたての松）があるのを見ることは悲しいことよ。

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しき㉑

と言った。とはいえやはり満足しない（＝悲しきは尽きない）のでしようか。またこのように（詠む）。

とぞ言へる㉒。なほ飽かずやあらむ㉓。またかくなむ㉔。

亡くなった我が子が千年生える松のように生きるのを、（私たちが）見るとしたら、（遠い土佐で）永遠の悲しい別れをしただろうか、いや、していないだろう。

見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせまじや㉕

忘れがたく残念なことが多いけれど、書き尽くせない。とにかく（この日記を）早く破り捨ててしまおう。

忘れがたく口惜しき㉖こと多かれど、え尽くせず㉗。とまれかつまれ㉘、とくく破りてむ㉙。

6、品詞分解

単語	品詞等	聞き	動詞・カ四・連用形	荒れ	動詞・ラ下二・連用形
京	名詞	し	助動詞・過去・連体形	たる	助動詞・存続・連体形
に	格助詞	より	名詞	なり	助動詞・断定・連用形
入り立ち	動詞・タ四・連用形	も	係助詞	けり。	助動詞・詠嘆・終止形
て	接続助詞	まし	動詞・サ四・連用形	中垣	名詞
うれし。	形容詞・シク・終止形	て、	接続助詞	こそ	係助詞(係)
家	名詞	言ふかひなく	形容詞・ク・連用形	あれ、	動詞・ラ変・已然形(逆)
に	格助詞	ぞ	係助詞(係)	一つ家	名詞
至り	動詞・ラ四・連用形	こぼれ	動詞・ヤ下二・連用形	の	格助詞
て	接続助詞	破れ	動詞・ヤ下二・連用形	やうなれ	助動詞・比況・已然形
門	名詞	たる。	助動詞・存続・連体形(結)	ば、	接続助詞
に	格助詞	家	名詞	望み	動詞・マ四・連用形
入る	動詞・ラ四・連体形	に	格助詞	て	接続助詞
に、	接続助詞	預け	動詞・カ下二・連用形	預かれ	動詞・ラ下二・連用形
月	名詞	たり	助動詞・存続・連用形	る	助動詞・完了・連体形
明かけれ	形容詞・ク・已然形	つる	助動詞・完了・連体形	なり。	助動詞・断定・終止形
ば、	接続助詞	人	名詞	さるは	接続詞
いと	副詞	の	格助詞	便りごと	名詞
よく	形容詞・ク・連用形	心	名詞	に	格助詞
ありさま	名詞	も	係助詞	もの	名詞
見ゆ。	動詞・ヤ下二・終止形			も	係助詞

絶えず	副詞	こころざし	名詞	五年	名詞
得	動詞・ア下二・未然形	は	係助詞	六年	名詞
させ	助動詞・使役・連用形	せ	動詞・サ変・未然形	の	格助詞
たり。	助動詞・完了・連用形	む	助動詞・意志・終止形	うち	名詞
今宵	名詞	と	格助詞	に、	格助詞
「かかる	動詞・ラ変・連体形	す。	動詞・サ変・終止形	千年	名詞
こと。」	名詞	さて	接続詞	や	係助詞(係)
と	格助詞	池めい	動詞・カ四・連用形・イ音便	過ぎ	動詞・ガ上二・連用形
声高に	形容動詞・ナリ・連用形	て	接続助詞	に	助動詞・完了・連用形
もの	名詞	くぼまり、	動詞・ラ四・連用形	けむ。	助動詞・過去推量・連体形
も	係助詞	水	名詞	かたへ	名詞
言は	動詞・ハ四・未然形	つけ	動詞・カ四・已然形	は	係助詞
せ	助動詞・使役・未然形	る	助動詞・存続・連体形	なくなり	動詞・ラ四・連用形
ず。	助動詞・打消・終止形	所	名詞	に	助動詞・完了・連用形
いと	副詞	あり。	動詞・ラ変・終止形	けり。	助動詞・過去・終止形
は	係助詞	ほとり	名詞	今	副詞
つらく	形容詞・ク・連用形	に	格助詞	生ひ	動詞・ハ上二・連用形
見ゆれ	動詞・ラ下二・已然形	松	名詞	たる	助動詞・存続・連体形
ど、	接続助詞	も	係助詞	ぞ	格助詞
		あり	動詞・ラ変・連用形	交じれ	動詞・ラ四・已然形
		き。	助動詞・過去・終止形	る。	助動詞・存続・連体形

大方	名詞	こ	名詞	かかる	動詞・ラ四・連体形
の	格助詞	の	格助詞	うち	名詞
みな	副詞	家	名詞	に、	格助詞
荒れ	動詞・ラ下二・連用形	にて	格助詞	なほ	副詞
に	助動詞・完了・連用形	生まれ	動詞・ラ下二・連用形	悲しき	形容詞・シク・連体形
たれ	助動詞・存続・已然形	し	助動詞・過去・連体形	に	格助詞
ば、	接続助詞	女子	名詞	たへ	動詞・ハ下二・未然形
「あはれ。」	感動詞	の	格助詞	ず	助動詞・打消・連用形
と	格助詞	もろともに	副詞	して、	接続助詞
ぞ	係助詞(係)	婦ら	動詞・ラ四・未然形	ひそかに	形容動詞・ナリ・連用形
人々	名詞	ね	助動詞・打消・已然形	心	名詞
言ふ。	動詞・ハ四・連体形(結)	ば、	接続助詞	知れ	動詞・ラ四・已然形
思ひ出で	動詞・ダ下二・未然形	いかが	副詞(係)	る	助動詞・存続・連体形
ぬ	助動詞・打消・連体形	は	係助詞	人	名詞
こと	名詞	悲しき。※	形容詞・シク・連体形(結)	と	格助詞
なく、	形容詞・ク・連用形	船人	名詞	言へ	動詞・ハ四・已然形
	名詞説。四段動詞の連用	も	係助詞	り	助動詞・完了・連用形
思ひ	形説。シク活用形容詞「思	みな、	名詞	ける	助動詞・過去・連体形
	ひ恋し」の一部説がある。	子	名詞	歌、	名詞
恋しき	形容詞・シク・連体形	たかり	動詞・ラ四・連用形		
が	格助詞	て	接続助詞		
うち	名詞	ののしる。	動詞・ラ四・終止形		
に、	格助詞				

生まれ	動詞・ラ下二・連用形	なほ	副詞	遠く	形容詞・ク・連用形
し	助動詞・過去・連体形	飽かず	動詞・カ四・未然形	悲しき	形容詞・シク・連体形
も	係助詞	や	助動詞・打消・連用形	別れ	名詞
帰らぬ	動詞・ラ四・未然形	あらむ。	係助詞(係)	せまし	動詞・サ変・未然形
ものを	助動詞・打消・連体形	また	動詞・ラ変・未然形	や	助動詞・反実仮想・終止形
わが	接続助詞	かく	助動詞・推量・連体形(結)	忘れがたく	係助詞説。終助詞説がある。
宿に	名詞	なむ。	副詞	口惜しき	形容詞・ク・連用形
小松の	格助詞	見し	副詞	こと	形容詞・シク・連体形
ある	名詞	人	係助詞(省略)	多かれ	名詞
を	動詞・ラ変・連体形	の	動詞・マ上一・連用形	ど、	形容詞・ク・已然形
見る	格助詞	松	助動詞・過去・連体形	え	接続助詞
が	動詞・マ上一・連体形	の	名詞	尽くさ	副詞
悲しさ	格助詞	千年	格助詞	ず。	動詞・サ四・未然形
と	名詞	に	名詞	とまれかうまれ、	助動詞・打消・終止形
ぞ	格助詞	見	格助詞	とく	連語
言へ	係助詞(係)	ましか	名詞	破り	副詞(もと形容詞・ク・連用形)
る。	動詞・ハ四・已然形	ば	格助詞	て	動詞・ラ四・連用形
	助動詞・完了・連体形		動詞・マ上一・未然形	む。	助動詞・強意・未然形
			接続助詞		助動詞・意志・終止形